

Title	藤田明氏報告「安らぎを感じる発音・発声」((児童)における「総合人間学」の試み研究会)」
Author(s)	田澤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.1, 2012.9 : 21-23
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4003
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈児童〉における「総合人間学」の試み研究会 藤田明氏報告「安らぎを感じさせる発音・発声」

田澤 薫

2012年度最初の「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会が、4月2日の入学行事の後に催された。今回は、藤田明氏（聖学院大学児童学科）が「安らぎを感じさせる発音・発声」と題して報告くださった。多彩な音声資料・映像資料を示しながらの説明は興味深く、世界的な音楽家・俳優らの美しい発声に魅了されながら、時間を一杯に使っての発題を参加者一同で大いに楽しんだ。以下は、報告内容の概要である。

会話時の発声の研究は、医学の領域や工学の領域でもなかなか探求されきれていない。工学的にも解明できないほどの、非常に細かな神経の動きを感覚的に捉えたいうえでしか論じ得ない領域である。また現実の発声となると、研究成果からの知識だけで実現することは不可能である。そこで、保育者・教育者を目指す学生たちが「安らぎを感じさせる発音・発声」を習得するには、身体的機能からの発声のメカニズムを分析すると共に、訓練を重ねる必要がある。

この研究への動機は、自身が音楽を学ぶなかで、日本人の発声と外国人の発声は根本的に異なることに気づかされたことに始まる。身体から空気が抜けているか、抜けていないかの差が、日本人とヨーロッパの人たちとの間には大きい。また歌唱時の顎の脱力についても、日本人には難しい。それは、日本人の発声は咽喉を鳴らす方法が一般的であることに起因する。欧米人の発声は咽喉が鳴らず、空気を吹くような呼気の使い方をするなかで自然に声帯が鳴る。自然に声帯を鳴らす発声を求めて実践を繰り返していたところ、ヨーロッパの主要な劇場で活躍されたドイツ人音楽家には「（日本人音楽学生のなかで）おまえだけが体から息が通っている」と高く評価されたが、一方で、日本人指導者には「おまえは声を持ってない」と

批判された。日本では、咽喉を鳴らさない発声は、声を持っていないとみなされがちである。

音楽家として歌の中での発声を模索するうちに、ドイツの駅に降りてドイツ人同士の会話を聞いてはっとさせられた。会話時の発声に全てのものが入っていることに気が付いたのである。そこで、「日本の会話時の発声と外国人の会話時の発声の違い」を研究することにした。様々な人が話しているのを耳を澄まして聞くという手法をとって研究分析するうちに、例えば歌唱時の発声の場合、日本人では顎が固いために「エー」と「イー」の発音に特徴的な喉の鳴らし方をする発声になり、非常に鋭いが、ドイツ人では非常にまろやかな発声であることにも気がついた。

まず、言語習慣の最も基本になるものを比較する。欧米人の子どもと日本人の子どもの「ピー」「エー」「パー」という発音方法の違いを提示した音声学のビデオによると、お腹の動き方がまったく違うことが明らかである。これは呼吸法の違いから来るもので、日本人が行なっているのは胸式呼吸で、肋骨を筋肉で持ちあげて空気を吸い込み、息を吐く時は持ちあがっていた肋骨が下がる。これに対し、欧米人の腹式呼吸では、横隔膜を押



DVD、CDなどを使用して講演が行われた

し上げて、より積極的に息を吐き出している。

人間は起立時に肺は肋骨で守られており、肋骨が動かない限り胸の空気が使えない。重力の関係で常に下へ下へと重たい内臓が降り、そのために呼吸をするとどうしても胸が下がりが胸式呼吸になってしまう。ところが、横臥時や水泳等で水中で横になった際には、重力の影響を受けにくく骨があつて動きにくい肋骨より腹部が動いて腹式呼吸となる。起立時に肋骨を守りながら発声することは非常に難しいが、訓練をすればできる。横隔膜を使う腹式呼吸で発声する場合には、胸を上げたままにしておいて呼吸をすると、腹部が動きやすい。

次に、胸式呼吸と腹式呼吸の違いが発音にどう影響するかを考えてみる。日本語は母音が発音の中心になるため、子音が圧縮された空気を使って発音されず、結果的に子音と母音が付いた状態になる。例えば、空気が前に出て行かずに「パー」と聞こえる。欧米人では、「ッパー」と聞こえ、子音を爆発させた直後の空気が勢いよく前へ出ていく。欧米人の子音の強さは、映画「サウンド・オブ・ミュージック」が分かりやすい。強い勢いで発音し、声を鳴らす暇がなく空気がボンボンいつている。歌唱時には、空気が常に前に送られるのでハーモニーが美しくなる。

ヘルマン・クラインによる「樅の木 O



報告者の藤田明教授

TANNENBAUM」を聴くと、「タンネTannen」と「タンネ」の発音の間に、空気だけで歌唱が処理されていることが分かる。イタリア人アナウンサーの司会を聴くと、同様に、子音での発音であるために非常にまろやかに聞こえる。対して日本人によるアナウンスは、空気の通りがなく、発声が喉だけに集中されており、緊張感のある声として聞こえる。

次には、空気が歌唱にどのように使われたらどのような表現になるのかを考えてみたい。マリリン・ホーンの歌唱を聴くと、抵抗感がなく体から空気が抜けていくことが明白で、軽やかでダイナミックである。バス歌手のクルトモアも同様で、抵抗がなく声が響いていく。一方で、日本人では喉が硬い。何十年も欧米に暮らしている日本人でも日本人特有の発声から離れられず、子音が聞こえてこない、子音と母音がいつもつながっている状態で咽喉で歌う。同じことは会話時にもみられる。映画「知性と感性」において母親と少女と話している場面で、母親の話し方から顎の柔らかさが分かる。顎が柔らかいだけでなく、空気を抜きながら発声している。顎が柔らかいために響きが頭の方に行き、軽い響きを生んでいる。このような発声習慣は日本人にはない。日本人キャスターも、口は横には開くが顎の動きはほとんど見られない。本来は、口を開けるときに顎を脱力し、顎が一番後ろに下がる状態となることが望ましい。

以上のような、欧米と日本における発声に見られる差異は、言語習慣に依るものであり、根が深く、簡単に変化させられるものではないと考えられる。同じ傾向は、声の領域を超えた場面でもみられ文化的土壌を感じさせる。一例をあげれば、ピアノ伴奏者ジェラルド・モアの公開レッスンを受けた際、全部にスタッカートがかかる演奏に接し驚かされた。スタッカートの奏法が少し離れて聞くと非常にキレがある美しい音を構成しており、この奏法は言語習慣から来ていることが感じられた。こうした演奏上の特徴はピアノに限らず、欧

米人は、弦楽器においてもいわゆる「音の立ち上がり」を大切に、音の最初を捉えた演奏を行うが、日本人にはなかなか難しい。また、調律の場面でも、ドイツのピアノ調律師は鍵盤をパンと叩いた瞬間を捉えて調律するが、日本人はパーンと鳴らしながら鳴りつづける音を聴いて調律をしていくという。これは日本語とドイツ語の発声の違いそのものである。

そうした言語習慣や生活文化に関わる根源的な差異であることを踏まえつつも、改めて子どもたちに向き合う大人は、優しい声で子どもたちに話したいと願う。母音を押す発声ではなく、声を常に送る幅の広さを感じさせる発声で向き合うことが大切だと考える。呼吸方法を意識することに加えて、顎をできるだけ柔らかくして早く動かすことを心がけることで、子どもたちの育つ環境としてふさわしい大人の発声を習得できるだろう。

(文責：たざわ かおる 聖学院大学人間福祉学部児童学科教授)

聖学院大学出版会の本

福祉の役わり・福祉のこころ シリーズ



シリーズ3巻

とことんつきあう関係力をもとに

岩尾 貢, 平山 正実 著

定 価:600円 + 税 ISBN978-4-915832-89-5
C0036

シリーズ4巻

みんなで参加し共につくる

岸川 洋治, 柏木 昭 著

定 価:700円 + 税 ISBN978-4-915832-92-5
C0036

シリーズ5巻(近刊)

生きがいを感じて生きる

日野原 重明 著

全国の書店でご注文・お取り寄せいただけます。

amazon.co.jpでもご購入いただけます。

お問い合わせ先

聖学院大学出版会 TEL 048-725-9801

書籍の詳細は大学出版部協会ホームページに掲載されています。ご覧いただければ幸いです。

アドレス <http://www.ajup-net.com/>